

来年の稲づくりに向けて、収穫後の耕起は早めに行い、土づくりに努めましょう

本年の水稲栽培では大きな気象災害などがなく、順調に生育、登熟して収穫期を迎え、農水省による令和4年産水稲の8月15日現在における作柄概況では、茨城県はやや良と見込まれています。

一方、病害虫の発生では、県西、県南地域を中心に県内広域に発生している縞葉枯病が、今年も媒介虫ヒメトビウンカの保毒虫率の高い状態が続いているため注意報が発表され、防除対策の徹底が継続して呼びかけられています。

また、水田雑草では全県下で1年草のヒエ類のほか、多年草のクログワイやオモダカなどの発生が増加傾向にあり、栽培上の課題となっています。

これら対策の一つとして、水稲の収穫後は早めに水田を耕起することで、水田で越冬する病害虫や雑草の越冬量を抑制し、さらに、刈り株や稲ワラを収穫後の早期に土中混入することで、分解、腐熟を促進して土中有機物を増加させ、水田の地力向上を図る土づくりに努めましょう。

1 イネ縞葉枯病の伝染源および媒介虫ヒメトビウンカの越冬率の低下促進

イネ縞葉枯病はヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、田植後の分けつ期に感染、発病すると、新葉が展開せずに「こより状」に垂れ下がり（ユウレイ症状）、枯れます。また、幼穂形成期以降に感染した場合は、出すくみや奇形穂となって稔実不良や不稔になります。縞葉枯病に感染した株は、刈取り後のヒコバエ（再生イネ）で病徴が明瞭にあらわれ、これもヒメトビウンカの保毒源になります。

伝染環として、ウイルスを保毒したヒメトビウンカ老熟幼虫が水田周辺のイネ科雑草などで越冬し、その後、麦畑などイネ科植物などで増殖します。主に6月上～中旬頃からは水田に飛来し、イネにウイルスを感染させます。ウイルスは卵を通して次世代の虫にまで移行しますので、越冬虫の保毒虫率が高いと縞葉枯病の発生が多くなります。

縞葉枯病の対策として、水稲収穫後の刈り株に生じるヒコバエ（再生稲）が秋の保毒源となり、また、媒介虫ヒメトビウンカの生息場所となることから、出来るだけ早く水田を耕起することで、伝染源の枯殺と縞葉枯病ウイルスを保毒したヒメトビウンカの越冬虫数を低下させる効果が期待できます。

2 水田の難防除雑草クログワイ、オモダカ等の除草対策

多年生の塊茎で増殖するクログワイやオモダカ、ミズガヤツリ等は、収穫後なるべく早めに耕起することにより、塊茎の形成を妨げることができます。また、地表に塊茎を露出させることで、冬季の低温や乾燥にあてて塊茎の越冬量を減らす効果が期待できます。

なお、クログワイの多発生した圃場では、水稲の収穫後に直ちに耕起を行わず、クログワイの地上部が枯れる前にラウンドアップマックスロードなど非選択性の除草剤をなるべく早く、10月中旬頃までには散布して、越冬する塊茎等をできるだけ枯死させます。この場合、水稲収穫の際はやや高刈りにしてクログワイの茎葉部をなるべく残し、稲わらを持ち出すかクログワイに薬液がかかりやすくなるように均一に散らしてから除草剤を散布し、その後に耕起することにより、高い除草効果が期待できます。（令和4年10月6日現在）

3 水田の土づくりによる地力の向上

水田の土づくりとして、毎年、完熟な有機物を適量投入することが必要です。収穫後の稲ワラについては、秋の早期に土中に混入し、腐熟化を促して土中有機物として地力を高めることができます。稲ワラが土中で分解、腐熟するためには、微生物の活発な活動が必要となり、そのためには適度な土壌水分や耕耘による酸素の補給と、できるだけ地温が高い時期（出来れば10月末頃まで）に土中混入して分解、腐熟を促進させることが望まれます。なお、耕起前に稲ワラの分解、腐熟を促進させる資材として石灰窒素（約20 kg/10 a）や微生物資材の、わら分解キング（約10 kg/10 a）、わらゴールド（約30 kg/10 a）などを施用し、土中混入すると分解、腐熟が促進されます。

なお、未熟な稲ワラを田植時期の近くなって土中へ耕起すると、土中分解が不十分となる恐れがあり、代かき後にガスの発生や植えた稲の生育を阻害する場合などがあるので注意が必要です。また、通年の湿田では酸素の補給不足などで稲ワラの分解不良等の場合があり、未熟な稲ワラの土中混入は控えます。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 NEWS は JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。